

# 復興への道を拓いた「弁当プロジェクト」

佐藤正克

(さとう まさかつ)

小千谷鮮魚商組合組合長

新潟県水産物商業協同組合理事長

中越地震で被災した小千谷で生まれた「弁当プロジェクト」。

それは、被災者自らが被災者のための弁当づくりを担うことで、  
仕事と収入を確保するとともに、復興の近道ともなるものであった。

プロジェクトの先導者がその経験を振り返る。

## 1 小千谷を襲った地震

私たちは、市場の買參人でつくる60店ほどの組合です。2004年の中越地震では、それまで経験したことのない揺れに襲われました。ライフラインが寸断している中、被災者向けの弁当事業にとりかかりました。

2007年には中越沖地震が起き、柏崎鮮魚商組合が中心になって市内の製造可能な飲食業者を巻き込んだ事業に発展しました。被災地で仕事をつくるという意味は、お金だけでなく、地元に対する思い、私たち事業者の復興の近道にもつながるのではないでしょうか。

2009年10月23日で、あの大地震から5年が経ちました。2004年10月23日午後5時56分、その日は夕日がとてもきれいでした。たまたまその日は、鮮魚商組合と魚沼水産協同の、小千谷市民対象の市場まつりの前日でした。翌日の準備のため、多数の組合員、市場従業員が市場まつりの会場である市場場内

で設営に追われていました。突然、ジェット機の低空飛行のような音とともに、下から突き上げる強力な揺れに襲われ、一瞬何が起きたのかわかりませんでした。3分後に余震が始まり、2時間ほどの間に震度7から震度5弱の余震が11回もありました。

停電になり、水道やガスもすべて止まっていました。あたりはすっかり真っ暗です。その暗闇の中で、家が倒れる音を何度も聞きました。あの音は一生忘れる事はないでしょう。車を止めていた駐車場は、いたるところに亀裂が入り、マンホールがゆっくり浮き上がりてくるのを目の当たりにしたときは、本当にびっくりしました。道路は段差ができ、いたるところで通行止。信号機まで倒れています。あんなに近くで信号機を見る機会はそうそうないでしょう。「普段の印象よりかなり大きいのだなあ」と思ったのを、今でもよく覚えています。

幸いにも、市場で作業していた人たちには人的被害はありませんでしたが、準備してい

た魚が場内いっぱいに散乱していました。ひっそりとした静けさの中、活魚の跳ねる音、ロブスターが歩く音がします。普段は小さな音なのに、このときは異様に大きく聞こえました。暗闇の中、夜空の星が輝いています。夜が明けて、災害の大きさになんと驚いたことか。

## 2 「弁当プロジェクト」の始まり

震災から10日ほど経ったころ、小千谷市から被災者向けの弁当の依頼がありました。ライフラインがすべて止まっている中、組合員のほとんどが、毎日家の片づけに追われていました。被災状況を見ながら参加を呼びかけようとしても、電話が通じないところが多く、一軒一軒回って事情を説明するしかありません。国道がくずれ、隣の川口町へは行くことができません。

集まってくれたのは20名ほどで、普段は白衣を着て、包丁を持って仕事をしている人たちです。ところがその時はヘルメット、泥だらけの軍手に長靴、手には懐中電灯。とても8,000食の弁当をつくる集団には見えません。400食ぐらいであれば、普段から弁当をつくっている人たちにはそう難しいことではないのですが。

納入初日まで日数がない中で、メンバーとの会合を繰り返し、議論を交わしました。けが人がいないことは幸いでしたが、店が全壊、半壊、一部損壊で、無傷の店舗は一軒もありません。商売道具の皿、機械、食材もほとんどありません。廃業という話が出る人もいました。昼間はがれきの片づけに追われ、早い



弁当づくりをする小千谷鮮魚商組合の組合員たち

日没がさらに気持ちを暗くします。

このような状況でも、発注を受けた以上、どうしてもプロジェクトを成功させたい、という強い気持ちが私の中に沸き起こっていました。

このころ、外部からの物資や食事も日に日に豊富になり、ボランティアの方々も市内に多数来てくださり、被災者としてわがままになりつつあったような気がします。10月の下旬といつても比較的暖かく、遠方からの配給の弁当に異臭等の問題が発生しているのを聞きました。このままでは被災地に2次災害も起こりかねません。調理から配達、被災者へと、自分たちでできれば時間の短縮にもつながるのではないか、と思いました。

## 3 立ちはだかった問題

第一に米飯の問題です。集まったメンバーの中で火が使えるのは1店しかなく、8,000食の弁当というのは大変な数でした。米は支援物資で豊富にあったので、日頃取り引きのある越後製菓さんに炊飯をお願いしたところ、心よく引き受けてもらうことができ、解決す



小千谷の総合体育館には大勢の人々が避難していた。

ることができました。

11月とはいって、熱いものと冷たいものと一緒にするのは、事故の原因になるかもしれません。ご飯という一番の問題をクリアできることは、大きな前進でした。

次は、調理場の問題です。被害が大きく、調理場が使えない店も何軒かありました。市場である魚沼水産の催事用に使っている“まごころ市場”を使わせてもらえることになりました。毎週日曜日にフリーマーケットを行っているところです。以前はセリ場だったので、広さは十分でした。

そこに長テーブルを並べて、その上にマルチ（農業用の大きいラップ）を敷いて、臨時の調理台をつくりました。400パックが一度に並ぶ光景はすごいものでした。食材は魚沼水産が一括で集めてくれました。交通状態の悪い中、従業員も必死だったと思います。

## 4 1カ月半で10万食

前日の夜、当日の弁当の数の割り振りをし、出来上がりが同じになるように、献立のコピーと食材を渡します。平均すれば1店につき一日400個ですが、毎日数の変動があり、全体を増やしたり減らしたりすることは大変です。店の状態により、100個の人もいれば200個の人もありました。ガス、電気、水道設備の整った店に対しては、数を多めに割り当てておいて、増減があった場合、その店で追加をしたり、減らしたりという仕組みをつくりました。集合をかけて集まつてもらった人たちには、どうしてもこの仕事をやってもらいたかったのです。

みんなの「駄目だ」とか「無理だ」という問題点を一つ一つ埋めることができ、震災から2週間目に、いよいよプロジェクトの初日を迎えました。そのころ、小千谷市の避難所は120カ所、避難者は2万8,000人（人口4万2,000人）ほどでした。初日をクリアできれば、プロジェクトは成功すると信じていました。当日の朝、夜明け前に市場に材料を取りに行き、店に戻って盛り付けをする。初日の午後2時、集合場所に8,000個の弁当がダンボールに入れられ、山に積まれていました。最後に数を確認した時は、もう少しで涙があふれるところでした。

「弁当プロジェクト」という名前は、学者の先生がつけてくれたものです。当時は一日一日が必死でした。今まで味わったことのない緊張感や危機感の中、1カ月半で10万食を配給し、事故もなく終わることができました。

この仕事が始まるまでは、ほとんどの人が

朝から晩まで家の片づけに追われていました。普段であれば、冠婚葬祭の宴会関連の仕事がありますが、震災後すべてがキャンセルです。おのずと現金収入もゼロになります。仕入れのお金、従業員の給料を払うのも厳しくなります。この事業に関する仕入れ、支払いはすべて組合が一括して行いました。行政のほうからの入金を早めてもらい、組合員には純利益のみ渡しました。

義援金も非常にありがたかったです。自分たちの仕事で得たお金は、また格別のものを感じました。この仕事を始めてからは、考え方も変わってきたように思います。また、私たちの本来の仕事である食に携わることができたのは、本当にありがたかったです。

## 5 弁当プロジェクト、柏崎へ

中越地震から3年後の2007年7月16日、中越沖地震が発生しました。大きな揺れが小千谷でも感じられました。ニュースでは、震源は柏崎だということ。世界一の原発から、煙が上がっているのも報じられました。

柏崎にも同じような組合があります。翌日、私も現場に駆け付けました。小千谷から車で30分ほどの海岸沿いの町です。現場に近づくにつれて、道路が割れたり、家が倒壊し、瓦は散乱、塀は倒れ、3年前に見た光景とそっくりでした。

これだけの規模の地震だと、おそらく仕事は全部なくなるだろうと、柏崎の組合長に話しました。被災者向けの弁当をつくるなど、組合員の仕事の確保を考えたほうが良いので



中越沖地震で被災した柏崎でも「弁当プロジェクト」が行われた。

は、とも伝えました。「今はまだ、電気、ガス、水道が止まっているから」と言われ、「ああ、やっぱり同じことだ、全く危機感がない」と感じました。

地震発生から3日後、防災科学技術研究所の永松伸吾氏と弊組合の常務が、小千谷の弁当プロジェクトの資料を持って柏崎に説明に行きました。小千谷のプロジェクトは行政の依頼から始まりましたが、柏崎はライフラインの工事業者の依頼から始まりました。一つの組合で受けけるのではなく、市内の食堂、旅館、寿司組合など飲食業全体を巻き込んだ仕事になりました。

被災地での弁当づくりの最大のネックは、米飯です。それは、小千谷でも柏崎でも同じでした。現在ではおかずになる部分は、冷凍食品、レトルトとさまざまなものがあります。ご飯もパックのものや冷凍、お湯を入れればできるもの、多種多様にありますが、救援物資で届いた米を活用するのは、被災地ではとても難しいのです。

多数の店舗で製造する場合、マニュアルの徹底も重大な問題です。食材、価格、数量、気候、地域性、様々な違いがあります。柏崎

の場合、小千谷の弁当プロジェクトを参考にはしましたが、マニュアルは自分たちでつくり上げないと、初日が始まってしまえば、毎日毎日問題が起きます。自分たちでつくったマニュアルであれば、即対処できるはずです。そして、問題の先送りも、してはならないことの一つだと思います。

2009年10月に、新潟国体が開催されました。被災地の小千谷や柏崎でも競技が行われました。選手、関係者の弁当の受注も、早い段階で組合単位で動き出していました。柏崎では、数はいくつでも受けられる自信があるようでした。以前であれば、注文がわかつてから動き出すというのが普通でしたが、今は自分たちから発信していくという方向に変わってきたようです。それも、あの震災で弁当プロジェクトをやりとげたという自信からきているのでしょうか。

小千谷では、2009年10月23日で震災から5周年を迎えました。各地で様々なイベントが行われています。かつて3,000名の避難者がいた小千谷の総合体育館でも、催し物がありました。弁当プロジェクトのメンバーも参加し、震災の時に振る舞ったカニ汁を提供させていただきました。私も震災時に弁当を運んでいたところです。5年前、体育館の2階から見た様子は、布団がいっぱいに敷き詰められ、多くの市民が生活していました。それがどうでしょう、あの光景とは一変した華やかさがありました。

## 6 終わりに

今後、地震、台風など大規模な自然災害が発生すれば、地元経済に大きな打撃を与え、

収入の機会を失い、不安を抱えることになるでしょう。特に私たちのような小規模な小売業者は、単に外部からの支援を待つだけではなく、現状解決に向け全員で考え、行動を起こすことが大事だと思います。

被災したみんなが思ったのは、何かしなければと思っても、何をすれば良いのか、なかなかわからないということです。そういう中で自分たちができそうなことは、食に携わることだったのです。小千谷も柏崎も、あの厳しい状況の中、仕事ができたのは、組合員の協力とみんなが一つの方向を見ていたからではなかったかと思います。

義援金や行政からの支援もありますが、自分たちが本業で得た収入の方がずっと価値があり、自立した地域経済を築き、復興の近道になるのではないかと思います。配給の弁当、おにぎり、パンなど外部からの支援だけに頼って、ライフラインが復興するまで仕事に取り掛からなければ、私たちの復興も遅れたのではないかと思います。

被災地であっても、全員で考え、行動を起こせば、自分たちにも何かできることに気づかされました。小千谷でも柏崎でも、全国から駆け付けて来てくれた復興事業者や避難所のみなさんに、事故もなく弁当を届けられたこと、安堵感でいっぱいです。

また、この大震災で生まれた弁当プロジェクトは、どの業種にもあてはまるところがあるのではないかと思います。そのことを伝えしていくのも、私たちの役目だと思っています。この小千谷、柏崎の弁当プロジェクト成功の要因は、周りの人たちに恵まれたことです。応援してくださった全国の皆様に感謝致します。